

4月12日（日）サムエル記第二3章1～5節

「ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。」（1節）

サウルの家とダビデの家の間には、長く戦いが続き」ました。おそらく、このサウルの家との戦いにダビデの家が勝利し、そうすることで多くの分捕り物を手にしたことでしょう。そのような中で、当然のようにダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなっていきました。それとともに、ダビデの家が勝利し、繁栄することは主がともにおられたからであり、主のみこころだったということです。

2～5節には、ダビデの妻とその妻の間に与えられた子どもたちのことが紹介されています。長子は、イズレエル人アヒノアムによるアムノン（2節）。3節には、次男はカルメル人ナバルの妻であったアビガイルによるキルアブ。ナバルと彼の妻であったアビガイルのことについては、サムエル記第一25章2～44節に記されています。三男はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子アブサロム。四男はハギテの子アドニヤで、彼は王位継承争いに野心を燃やしました。

（列王記第一1章）五男はアビタルの子シェファヤ、六男はダビデの妻エグラによるイテレアムです。まさに、ダビデにこれだけの子が与えられたのは、主がダビデを繁栄させようとされたからであり、多くの富も所有し、豊かであったことも分かります。

ダビデの家が強くなり、ダビデに子が与えられたことは主からの大いなる祝福の結果でした。それは、一方的な神からの恵みの結果と言えます。神を信じている私たち一人ひとりも、自分の力で自分の人生を祝福できるのだと言わんばかりに、自力で何でもしようとし、まさに自分の力で強くならねばとがんばっているように見える方がおられますが、まことの祝福や恵みは、人の力で作り出すものではなく、神から一方的に与えられるものです。主を信じて歩むなら、主は必ず祝福してくださいます。感謝をして、主の祝福を日々受け取りましょう。

4月13日（月）サムエル記第二3章6～11節

「それは、サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を、ダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てるとのことだ。」（10節）

6節からはサウルの家のことについて語られていますが、アブネルが勢力を増し、その地位を強固なものにしていました。7節で、アブネルがサウルの側女であつたりツパと姦通したことをイシュ・ボシェテが知り、そのことをアブネルに問いたします。先君の王妃や側女をめとることは、先王の財産を占有し、王位を要求するに等しい行動でありましたから、イシュ・ボ

シェテにとっては、見過ごすことのできないことでした。すると、8節で軍の長にすぎないアブネルは、イスラエルの王であるイシュ・ボシェテに激しく怒りを燃やし、まず「この私がユダの犬のかしらだとでも言うのか」と言います。犬というのは人を卑下する時の表現なので、要は王であるイシュ・ボシェテが、自分のことを馬鹿にしていると言っているのです。そして自分はサウルの家とその兄弟と友人たちに真実を尽くして、サウルの家が減びないために、王であるイシュ・ボシェテをダビデの手に渡さないでいるのだと言い、このようにしてサウルの家に仕えている自分に、たかだか側女のこととどがめるのかと反論します。9節で「主がダビデに誓われたとおりのことを」というのは、サムエル記第一15:28のことを指していて、10節で語っているように王位をサウルから移して、ダビデをユダだけではなく、イスラエル全体の王とすることをアブネルは言おうとしています。もちろん、アブネルはサウルの家から王位が移され、ダビデがイスラエル全体の王となることを決して願っていたわけではなく、むしろイシュ・ボシェテを脅し、自分がサウルの家を守るためにどれだけ真実に尽くしているかを示そうとしたのかもしれませんが、主の語られたことは必ず実現することを、すべての人が知るようになるのです。

11節でイシュ・ボシェテはアブネルを恐れて、もはや彼に一言も返すことができませんでした。このような恐れによる支配は、どんな組織であっても決して健全とは言えません。特に、教会においては人への恐れや遠慮から言いたいことや言わなければならないことが言えないというような雰囲気が決してつくられてはなりません。むしろ、人の罪や教会の中の問題であったとしても何でも言い合えるような互いの関係であるべきです。

4月14日（火）サムエル記第二3章12～16節

「イシュ・ボシェテは人を遣わして、彼女をその夫、ライシュの子パルティエルから取り返した。」（15節）

1節に「ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。」とありますので、アブネルはイシュ・ボシェテとサウルの家を見捨てる決断をしたのでしょう。12節でダビデのところへ使者を遣わし、「この国はだれのものでしょうか。」と伝えさせます。これは修辭的な疑問文で、暗にイスラエル全土におけるダビデの主権を認める表現です。それに続けて「私と契約を結んでください。私は全イスラエルをあなたに移すのに協力します」と言わせます。これは、ダビデのもとに下るにあたり、自分の身の安全を保証することを要求したのです。そしてダビデはアブネルとの契約を了承しますが、一つ条件をつけました。それは、アブネルが

ダビデに会いに来る時にサウルの娘ミカルを連れて来るようにということであり、14節ではアブネルではなく、イシュ・ボシェテに使者を遣わして「私がペリシテ人の陽の皮百をもってめとった、私の妻ミカルを返していただきたい」と言わせました。何人かの学者は、ダビデはサウルのおじであり、サウルの軍の長であったアブネル（サムエル記第一14章50節参照）を十分に信用できなかったのも、ミカルを人質にしようとしたのではないかとはいえますが、14節を見ますと、むしろダビデはイシュ・ボシェテを王と認め、彼を通じて正式にミカルを自分のもとへ取り戻そうとしたと思われますし、それはむしろ政治的ということではなく、ミカルに対する個人的な思いが強かったと思われます。15節でイシュ・ボシェテは人を遣わし、夫パルティエルからミカルを取り返しましたが、彼は泣きながら彼女の後を追ってバフリムまで来たとあり、最後にはアブネルにより追いつかれました。

サムエル記第一18章25～27節を見ますと、サウルは妻ミカルをダビデに正式な妻として与えたにもかかわらず、25章44節を見ますと、ダビデの妻であった娘ミカルを、パルティエル（エル）に与えたことが分かります。恐らくダビデには何の断りもなくそのようにサウルはしたのでしょう。人の身勝手な行いは多くの人を傷つけてしまうことを思われますし、ダビデのもとに再びミカルが返されたことを通して神様はふさわしい時に間違ったことを常に正されることを思われます。

4月15日（水）サムエル記第二3章17～21節

「私は、全イスラエルをわが主、王のもとに集めに出かけます。彼らがあなたと契約を結び、あなたが、お望みどおりに王として治められるようにいたしましょう。」（21節）

12節で「ご覧ください。私は全イスラエルをあなたに移すのに協力します。」と言ったアブネルは、早速イスラエルの長老、つまり北の各部族を代表する長老たちに会います。そして「あなたがたは、かねてから、ダビデを自分たちの王とすることを願っていた」と言い、18節では「今、それをしなさい。」と伝え、その後主がダビデについて言われたことばをもって行動の裏付けとしています。18節の主のことばとしてダビデの手によりイスラエルをペリシテ人の手から救い出すことについて語っていますが、これはサムエル記第一9章16節でサウルについて見出すことはできてもダビデにこのように言われた箇所はありません。このようなうわさがイスラエルの中にも広まっていたのか、アブネル自身が主の名を持ち出して勝手に語っているのかよく分かりません。そして、サウルの出身地であるベニヤミン人とはじかに話す気配りを見せています。そして、イスラエルとベニヤミンの家全体が良いと思っていることを、すべて

ダビデの耳に入れました。ダビデは、ヘブロンの自分のもとに来たアブネルのために祝宴を開きます。恐らくこの時に妻ミカルもダビデのもとに連れて来られ、条件も果たされたこととされます。そして、その席でアブネルは「全イスラエルをダビデのもとに集め、お望みどおりに王として治められるようにいたしましょう。」と言い、ダビデはアブネルを送り出し、アブネルは安心して出て行きました。

あらためて私は、ダビデがなぜアブネルを受け入れ、彼と契約を結んだのだろうかと思いました。その中にあって一つ主から教えられたことは、ダビデはアブネルとの契約を拒否して、弱くなったサウルの家に進め込み、軍事力によって全イスラエルを統一して王になることもできたはずですが。しかしダビデは、それを望まなかったのではないかということです。むしろ、このようなアブネルの提案を主から出たこととして受け入れ、平和のうちに全イスラエルの王となることをダビデは願ったのではないかと思われました。主は私たちに思いがけないかたちで、思いがけない人を用いて導かれることがあります。その時に私たちは主の導きと確信したなら、従う信仰をもって歩みたいと思わされます。

4月16日（木）サムエル記第3章22～27節

「ヨアブは彼とひそかに話そうと、彼を門の内側に連れ込み、そこで彼の下腹を刺した。こうして、アブネルは、彼がヨアブの弟アサエルの血を流したことのゆえに死んだ。」（27節）

ダビデがアブネルを送り出し、彼が安心して出て行った後にダビデの家来たちとヨアブが分捕り物を持って略奪から帰って来ました。23節でヨアブは、アブネルがダビデ王のところに来て、安心して出て行ったことを聞かされ、24節で王のもとへ来て「何ということなされたのですか。」と激しく抗議します。25節では何の根拠もなくアブネルがダビデを惑わし、動静を探ろうとしてきたのだと訴えます。聖書には、そのことについて何の記述もありますが、ダビデからすれば、もはやアブネルとの契約を取り消すこともできず、ヨアブを説得しようとしたのではないかと思われます。ヨアブはダビデのもとを出てから使者を遣わし、ダビデの知らないところでアブネルを連れ戻させました。そしてヘブロンに戻って来たアブネルの下腹を刺して彼を殺しました。それが、弟アサエルの死に対する復讐であることを聖書は明らかにしています。

実弟のアサエルを殺されたヨアブが、アブネルを赦すことはそれほど簡単ではないことはよく分かります。しかし人は自分で復讐してはなりません。なぜなら、人による復讐は必ず憎しみがさらなる憎しみを生み、憎しみによる復讐は際限なく続けられることとなり、そもそも人

には神から復讐する権限は与えられていないからです。なぜなら復讐は神に属する領域であって、決して人に属するものではないからです。ローマ人への手紙12章19節に「愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。」と書かれてあるとおりです。ヨアブのように殺したいと思うほどではないにしても、赦せないとか憎いと思う人がいますか。次のようにともに祈りましょう。「主よ。今こそ赦します。夫を、妻を、子どもを、友人を、会社の同僚を……。主よ。私から先に手を指し伸ばします。新しい人生を作っていきます。しかし自分の力ではできません。私に赦す力と勇気をお与えください。」(ユ・クアンジェ牧師)

4月17日(金) サムエル記第二3章28～30節

**「ネルの子アブネルの血については、私も私の王国も、主の前にとこしえまで潔白である。」
(28節)**

後になってヨアブがアブネルを殺害したことをダビデは聞かされました。それについて「ネルの子アブネルの血については、私も私の王国も、主の前にとこしえまで潔白である。」と言います。なぜなら、ダビデが契約を結ぶと言ってアブネルをだましてヘブロンまで来させて、彼を殺害したと疑われることによりダビデの立場を大いに不利なものにする恐れがあったからです。また17、18節でイスラエルの長老がアブネルに説得されていましたが、ダビデに不信感を持ち、彼らがダビデとの契約を無効にする恐れもあったからです。このようにヨアブの私的な復讐心によるアブネルの殺害が、ダビデを苦しい立場に追い込み、血を流すことなく、ダビデがイスラエル全土の王となるとの計画を台無しにする恐れもありました。人の私的な復讐は、復讐した者とされた者との関係だけにとどまらないで、周りにもさまざまな影響を与えることを私たちは今日の箇所から知ることができます。

29節でダビデはヨアブに対する容赦のない呪いのことばを語ります。ヨアブの家には、「漏出を病む者」「皮膚をツァラアトに冒される者」これらは常に汚れた者として礼拝から断たれる者たちを指します。「糸巻をつかむ者」とは、障害のゆえに座ってする仕事しかできない者のことだと思われます。「剣で倒れる者」とは、戦に出てもすぐに剣で討たれることを言っているのでしょう。そして「食に飢える者」とは、食べられないような貧困に陥るということです。ヨアブの復讐は、彼だけではなく、彼の父の家全員に対して呪いを及ぼすこととなりました。ここでのダビデの呪いのことばを通して復讐は決して主のみどころではなく、主も復讐に対してはのろいをもってこたえられることを思わされます。主は決して私的復讐心から出た行いを喜ばれないのです。

4月18日（土）サムエル記第二3章31～39節

「民はみな、そのことを認めて、それで良いと思った。王のしたことはすべて、民を満足させた。」（36節）

31節でダビデは、ヨアブと彼とともにいたすべての兵に、衣を引き裂き、粗布をまとい、アブネルの前で悼み悲しむように命じ、そしてダビデ自らが棺の後をついて行きました。ヨアブはアブネルを殺した張本人でしたが、衣を引き裂き、粗布をまとして悲しみを現すことで、自分の犯した罪の大きさを知らされることとなりました。アブネルはヘブロンで葬られ、ダビデ王は、彼の墓の前で声をあげて泣き、民もみな泣きました。そして33、34節でダビデはアブネルのために哀歌を作りました。「愚か者が死ぬように、アブネルは死ななければならなかったのか」とは、神と律法に逆らう者として神に打たれるようにみじめな死を迎えなければならなかったのかと言っているのであり、「手足は縛られず、かせにもつながれずに」とは何の罪もないということを言おうとしているのですが、その者が「不正な者の前に倒れるように」の不正な者とはヨアブのことで、復讐心に満ちた不正な者であるヨアブの手によりなぜ殺されねばならなかったのかということです。この哀歌によって民はなお涙を誘われたことでしょう。さらに35節にもありますように、ダビデは断食をもってその悲しみを現しました。人々は一連のダビデのアブネルに対する哀悼を表す行いを認め、それで良いと思い、民は満足させられました。このようにして民はアブネルの死にダビデが一切関わっていないことを知ったのです。38節の「偉大な一人の軍の将」とはアブネルのことですが、39節では「今日の私は無力だ」というのは、ヨアブの復讐によるアブネル殺害を阻止できなかったということです。ダビデは、ヨアブの行動を止めることができなかったゆえに、自分の無力さを痛感させられ、「主が、悪を行う者に、その悪に従って報いてくださるように」と自分がどうすることもできないことについては、すべて主にゆだねています。自分の知らないところで起こったことについて、私たちは無力であり、どうすることもできません。そのような時は、すべてを知っておられる主が、悪い者にその悪に従って報いてくださるよう、ゆだねるしかありません。